

# 北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

——縄文文化社会の複雑化過程解明のために——

菊池 徹夫・高橋龍三郎・熊林 佑允

はじめに

およそ科学研究で「比較」の手法は重要かつ基礎的なもののひとつであろう。

人文科学では、たとえば比較文化、比較思想、比較文学、比較言語学等々が標榜されてすでに久しく、それぞれの分野で優れた業績が積み重ねられていることはいままでもない。

それらに比べると、史学の分野では、もちろん過去と現在という時間軸に沿った比較は当然として、必ずしも他地域、他文化との比較というアプローチは、それほど盛んではないように思われる。

それは、おそらく従来の、とりわけ日本における史学研究では、歴史はそれぞれに特殊・個性的なものとする考えが強く、一国史

北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

ないし一地域史としての、自己完結的な、言葉を代えて言えば空間的に閉鎖的な研究が一般的であったことが主な理由かと思われる。考古学に関しても、日本ばかりでなく旧世界では歴史学の一分野ないし一手法と考えられることがふつうだったから、状況は基本的に同じであった。それなりに理由のないことではなかったのである。

ところが、近年とくにアメリカ流の文化人類学的方法が盛んになったせい、より普遍的な一般理論の定立を目指す傾向も強くなり、また研究者をとり巻く環境じたいが国際化したこともあって、考古学はもとより、歴史学一般でも比較という視点・手法が重要視されてきたのだと思われる。

もっとも、そのいわば本家本もの文化人類学でも、伝統的な「比較」については批判・再批判の応酬があり、再検討がなされている(出口二〇〇三)。人類全体の「普遍・一般」を重視し、共時

的、通文化的な研究をむしろ当然としてきた文化人類学では、比較は当然のこととみなされ、これまであまりに無批判に、安易に行われてきたということなのかもしれない。

いずれにせよ考古学の研究は、本来これとは対照的に、良かれ悪しかれ個別具体的・実証的な傾向をもち、地域に閉ざされた研究が、ややもすれば、いわば「お国自慢」的になりがちだから、たとえ歴史学としての考古学の立場をとろうが文化人類学的考古学の立場に立とうが、広い視野での他地域との、あるいは多文化間での比較の操作は、相対性、客観性を保つためにも必要不可欠なのではないだろうか（B.G.トリッガー一九九一）。

つまり、私の目指す比較考古学とは、具体的個別・特殊の単配列のためではなく、ましてや「人類に普遍的な」などという一般法則追求のためでもない。異文化理解によって可能な限り自文化をいったん異化し、客観化し、見つめなおそうとするための方法といっ

よい。

その意味で、たとえばマギル大学のB.G.トリッガー(B.G. Trigger 1993, 2003)は、最近、エジプト、メソポタミア、中国、マヤ・アステカ、インカ、それにオルバの初期文明の比較から、人類史の普遍性にまで迫ろうとしている。比較考古学というに止まらず、比較文明的な視点で大いに刺激されるものがある。

さて、日本では以前と異なり、今日のように、海外調査や国際シンポジウムなど国際的な交流をはじめ、直接間接に海外諸地域の調査研究

成果に頻繁に接することができるようになった現在、世界各地との比較は十分に可能であり、むしろごく自然なことのように思われる。じっさい、たとえ結果的にせよ（かならずしも意図的でないにせよ）今日そうした手法による研究が少なからず見られる。

しかし、残念ながら、比較考古学と謳わぬまでも、考古学の研究で比較の手法を意識的に用い、なおかつ一定の成果や効果をあげている例は、日本ではまだ限られている。

濱田耕作（濱田一九二二）などの優れた先駆的業績は一応措くとして、管見に触れたところでは、たとえば都出比呂志（都出二〇〇〇）などが日本の前方後円墳と中国・エジプトおよびヨーロッパの王墓との比較を試み、また最近では前川要（前川一九九四）が、日本中世城郭や都市の実態解明のために、イングランド・ウェールズとの比較考古学的研究を試み、大きな成果をあげている例などが、とくに注目すべきであろうと思われる。

また川西宏幸（川西一九九九、二〇〇一）は『古墳時代の比較考古学』を著わして古墳時代をユーラシア古代世界の歴史的コンテクストの中で捉えなおそうとし、さらにB.トリッガーのEarly Civilizations: Ancient Egypt in Contextを訳出し、この分野に大きな貢献をしている。

角田文衛ら（角田・上田二〇〇三）は、多数の研究者を糾合し、古代王権の誕生をめぐる文字どおり世界各地の比較考古学的研究を試み、その成果を世に問うている。

この他にも、西南学院大学の高倉洋彰、金沢大学の佐々木達夫、広島大学では古瀬清秀らがそれぞれ比較考古学を冠した講座、講義を持っている。

以上のように、少数の注目すべき業績はあるものの、日本の比較考古学は、未だ拠るべき方法論は確立されていない。その必然性は感じつつも、個々の立場、関心、分野において実践のなかで模索している、というのが実情ではないか。私が仲間たちの協力のもとに学内に比較考古学研究所を立ち上げた所以も、まさにここにある。

幸い、私の周囲には、早稲田大学をはじめ、世界各地域をフィールドとして研究に従事している仲間たちが大勢いる。したがって、私の比較考古学研究所では、まず各研究員が、これまでも各自の関心と研究分野に応じて行ってきた、日本国内はもとより世界各地域・各時代における広範多岐な調査研究を、さらに深めつつ、折に触れその研究成果を持ち寄って、まずは「社会の複雑化」という共通の課題に基づいて問題点ごとに比較しあい、整理してみたいと願っている。

## I 研究テーマ「社会の複雑化」について

それではなぜ「社会の複雑化」を当面のテーマとするのか。

もとよりそれは、ほかでもない、まさに現代に生きるわれわれ自身の切実な問いに答えるためである。すなわち、戦争や暴力、環境

北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

破壊や人間疎外といったものと決別するにはどうすればいいのか。そのための模索である、といってもよい。

そのためには、まずそれらがいかんにして生み出されてきたのか、を知ることが不可欠であろう。

今日、まさにわれわれが生きる都市文明とは何か。近代科学を伴って高度に複雑化し、それだけにさまざまな問題をはらむ現代社会とは歴史的にいかなるものなのか。そうした問題を出来るだけ根源にまで溯って解明してみようというのである。

そこでは当然、狩猟・採集社会と農耕の発生の問題、集落の発展、都市と交易システムの問題、社会構造と複雑化の問題、他地域・多文化間の交流の問題等々が考察されることになる。

当然、考古学を軸に学際的なさまざまな方法によって、初めてそれは可能であり、むろん多くの困難が伴い、一筋縄で行かないことは予め承知の上である。

いずれにせよ、その核としては、やはり日本列島の中での社会の複雑化過程といった問題を、とりあえず据えてみたい。具体的には、旧石器文化から縄文文化へと展開する列島の石器時代文化における社会の複雑化・階層化の問題であり、さらには弥生文化から古墳時代そして奈良時代への変遷過程における日本的古代都市や国家の形成の問題である。このうち縄文文化の複雑化・階層化の問題については、今から十数年前に渡辺仁（渡辺 一九九〇）が先鞭をつけ、それをうけて、たとえば武藤康弘（武藤 一九九七）、谷口康浩（谷

口二〇〇二二、中村大（中村一九九九）、あるいは高橋龍三郎（高橋二〇〇一）らがさらに論を深めてはいるものの、全体としてはまだ緒についた段階といふべきであろう。

ところで、渡辺仁が考古民俗学的に比較の対象として中心的に取り扱ったのは、アイヌをはじめとするシベリア少数民族、それにアメリカンインディアンとくに北西海岸インディアン諸部族の文化であった。山内清男（山内一九六四）も、じつは、かつて縄文文化の本質を考えるに当って、とくにサケ・マス文化という共通性から、北米北西海岸インディアンとの比較を試み、その後、小林達雄、佐原真もこうしたことには言及している。

われわれも、近年明らかにされた三内丸山遺跡などの知見を見るにつけ、いよいよ、サケ・マスを中心とする漁労・採集文化、木工やバスケットを中心とする手工芸の発達、奴隷の存在、さらにはポトラッチといった風習をもつ北米北西海岸インディアンの文化と社会には、民族考古学的に比較の対象として大きな注目を払っていた（D. キュー、P. E. ゴッダード一九九〇）。

最近、菊池は、二〇〇一年にロシア極東シベリア、二〇〇二年にはイングランド・北欧およびメソアメリカのマヤ地域、そしてフランス・スペイン、そして二〇〇三年には極東カムチャッカ半島と、それぞれの地域で遺跡を訪ね、自分の目で遺物を見ながら、こうした問題を考えるよう努めてきた。

そして、二〇〇三（平成十五）年、菊池、高橋および熊林の三人

が北米北西海岸インディアン世界を訪れたのも、まさにそのような理由からであった。

われわれは、もとより日本と海外各地域との時間、空間的距離に十分留意し、彼我の間における歴史、風土、文化的特色と差異を明らかにしつつも、それぞれの自然環境、生業、社会、交易、工藝、物質文化、信仰、儀礼等々の特徴について考古民俗学的に比較して見たいと思っている。そして、そのことにより、縄文文化のもつ一般性、特殊性を可能な限り客観視できるようにする。このことこそ、われわれの目指す比較考古学の第一段階なのである。（菊池徹夫）

## II 北米北西海岸の文化と社会

### 一、自然環境と地理

北米北西海岸とは、通常、北米大陸の太平洋に面したカリフォルニア以北の北西海岸部（Pacific Northwest Coast）を指す。現在の地域区分でいうと、アラスカ湾のクーパー川デルタから、オレゴン州とカリフォルニア州の境をなすウインチュク川までの海岸部と、内陸においてはアラスカのチュガク、セント・エリアス地域から海岸沿いの山岳地帯、およびオレゴン、ワシントン州のカスケード山脈までを含む。大雑把に言うとなめりカ合衆国のワシントン州、アラスカ州、そしてその間に挟まれるカナダのブリティッシュ・コロンビア州を含み、北緯四二度から六〇度の間に位置する。

氷河時代に厚い氷床に覆われた海岸部は、完新世を迎えて世界的規模で温暖な気候環境に変わると、氷床が融解して、いままです陸地であった海岸低地は海面の上昇によって海中に没することになった。同時に融解した氷河は、各地に鋭い氷河地形を残しながら後退し、各所にU字形のカールとフィヨルド地形を形成した。海岸部においては急峻な岩山が海面から屹立して、そのまま山脈の峰々に繋がる。氷河によって寸断されたかつての台地周辺に海水が進入した結果、大小多数の島々が誕生することになった。そのうちバンクーバー島やクイーン・シャーロット島などは大きな島で、部族社会の成立と占有領域において重要な地理的位置を占めている。それらは複雑なフィヨルドの海岸線に囲まれ、魚類や水棲哺乳類の生息場所として、複雑な生態学的環境を提供している。フレージャー川、ベラ・クーラ川、ナス川、スキナー川等は内陸の山岳部を開析して、これらの海岸部に流れ込む。それらの大河は太平洋から内陸に遡上するサケ類の恰好の水路となり、海岸部、内陸部の住民が貴重な魚資源を獲得する生業場所になっている。

この地域は季節的に北太平洋高気圧とアリューシャン低気圧が南北方向の移動を繰り返す。北太平洋高気圧は冬を通じてカリフォルニア上空に留まり、春には拡大して、夏に北太平洋の大部分を覆う。一方、アリューシャン低気圧は夏には北ベーリング海上空にあり、秋には勢力を増して南下して、冬に北太平洋全体を支配し、春には徐々に後退する。これら前線と気団の交替により季節の変化に富む。

#### 北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

夏は冷涼で、冬には雨が多い。また温暖な北太平洋海流が南下して北西海岸を洗うために、気候は高緯度の割には温暖で、温帯冬雨気候である。その海流のために、内陸の植生はレッド・シダー、イエロー・シダーなどを主体とした針葉樹林を形成し、直径一メートルを越える巨木が鬱蒼とした樹林を形成した。北米先住民が先史時代以来、木彫品をはじめ各種の優れた工芸品を製作したのは、まさにレッド・シダーを材料にしている。

#### 二、北西海岸の民族的概要と文化領域

これらの自然環境の中で、先史時代から北米先住民 (Native American) の各部族が居住し、地域ごとの特殊性にあわせて文化と社会を発展させた。北米先住民は言語、宗教、社会組織などの点において、幾つかの文化領域 (Cultural Area) グループに分割することが出来るが、それらの分類は、歴史的環境とともにこれらの自然環境との適応過程で生み出されたと考えられる。また小地域 (Subarea) と称される北西海岸内部での部族的伝統文化の違いに基づいた地域区分があり、その成立と変遷については十九世紀から諸説がある。

北米北西海岸先住民とは、北部のエyak族から南のオレゴン州海岸部に住むクーサンズ族やアザパスカン族、タケルマ族までを包括し、その間に三〇近い部族を包括している。代表的な部族には、トリングット族、ハイダ族、クワキウトゥール族、ヌートカ族、セイ

リッシュ族などがある。これらの先住民は、形質的にみるとアメリカ大陸に居住する他の先住民と大きく異なることはない。これらの地域を含めて、遺伝子の供給が全地域におよび、ほぼ共通した形質をもっている。しかし、言語学的に見た場合、それらはかなり分節化しており、現在喋られている言語、あるいはかつて喋られた言語は十二言語族に概括され、その中に約四〇の言語が割拠している (W. Suttie 1990)。

### 三、社会の部族的統合

北西海岸の先住民社会は、よく部族社会といわれる。トリンギット族、ヌートカ族、ハイダ族、クワキウトゥール族、セイリッシュ族などは、集団のもつ言語・文化・社会的特徴によって文化領域が画定されている。そのような大きな区分は、「部族」のような地域的、地方的区分を越えている。むしろ、内部に多数の部族集団を内包する大きな単位として、いわば「部族連合」(Tribal Confederation) という上位概念で捉えた方が理解しやすい。例えばトリンギット族の内部に包括されるステイキネ族、カケ族のような集団を「部族」と捉えることは可能であろう。実際、トリンギットは内部が十四の小集団に分かれ、それぞれの部族が連合してトリンギットは成立している (P. Drucker 1955)。

その他に亜部族 (tribelet) という用語が用いられることもある (H. Driver 1969)。ドライバーによると、これは部族 (Tribe) の

一段階下のカテゴリーに属し、具体的には冬場の集落に集合する村落の集合体であるというので、ドラッカーのいう小さく区分される「部族」ということになる。

ヌートカ族の亜部族について見てみよう。ヌートカ族では、家族はプランク・ハウスに居住する大家族と家長から成り、村落 (village) は、大家族が多数集合して成立する。村落にはリネージの中で最高位の位階を保有する首長がいる。冬になると、「冬の村」を構成するために村落が多数集まって一つの居住集団を構成する。これが亜部族 (tribelet) と呼ぶ組織である (H. Driver 1969)。

### 四、文化・社会の経済的背景

北西海岸先住民に共通するのは、生業面において農耕を持たず、主にサケ類を中心に魚類への依存が高いことである。加えて海獣狩猟、陸棲動物の狩猟、貝類の採集、野生植物の採集等が生業の大部分を占め、それらの多くが貯蔵されることも大きな特徴になっている。北西海岸の諸族は主に海岸部の自然環境の恵みを受けて、狩猟、漁労、採集の生業に依拠しながらも、そこに P. ドラッカーが「狩猟・採集型の文明」と評したほどの、高度に発達した物質文化、精神文化、政治的統合、社会階層化を生み出した (P. Drucker 1967)。部族社会という社会進化史上では比較的低位な発展段階に位置づけられながらも、西アジアやインドス、エジプトなどの生産経済が築き上げた高度文明の初期段階に比肩されるほどの文化的要

素も登場したのである。その背景には豊かな資源と彼らの生業戦略が関係している。

北西海岸では、複雑に入り組んだ海岸線の河口部や湾入部、沖合において、サケやタラ、オオヒラメ、オヒョウなどを独特の釣り針や銛、梁、沈め籠、網類などで捕獲していた。特に大量のサケは乾燥させ、薫製にして備蓄した。キャンドル・フィッシュは魚油を獲るために大量に捕獲した。ヌートカ族やハイダ族では、そのために銛類、釣り針類の漁具の発達が著しい。カヌーを使う海獣猟は威信をかけた狩猟で、銛の打ち手は高い社会的評価を得る。特にアザラシやオットセイ、クジラなどの狩猟には儀礼を欠くことができず、それだけに高位の位階をもつ狩猟者だけが携わることができた (Drucker 1955)。貝類や海草類の採掘は主に女性の仕事で、ムツセル貝、カキ、ハマグリ、カニなどを多く採った。ケルプは海底から生える植物で、縄や綱を製作する上で重要であるばかりでなく、膨らんだ根を使って「蒸し曲げ法」により、釣り針の製作にも関与した (H. スチュアート 一九八七)。

陸生の哺乳類も彼らの重要な食料と材料を提供した。トナカイや山岳に棲息するヤギ、モルモット等は、食料だけでなく、豊かな毛はテイルカット毛布などを編む貴重な原料となった。またヤギの角を利用して製作したスプーン類も彼らの文化を代表する什器である。それらを捕獲するために、彼らは弓矢を携え、落とし穴や罠をしかけた。ベリー類の採集は女性の仕事で、乾燥処理で長期の備蓄が可能

#### 北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

になる。

北部においては、集落に数百人規模の人口が集まり、定住生活を送る。儀礼や祭祀などが発達して、親族組織を基盤に、社会の複雑化と階層化が進展している。これらは、豊かな資源と備蓄戦略がもたらしたものである (A. テスタール 一九八七)。

#### 五、親族組織と出自

北米大陸では、一般に出自原理によって、分節化した集団が多数見られる。母系出自とその出自集団は北西部の大部分に見られ、亜極北地域と北西海岸部も中に含まれる。また、母系出自は南西部のごく限られた地域、北部平原・プレーリーの三部族、東部地域にも見られる。一方、父系出自および父系リネージュはカリフォルニアと、隣接するバジャ・カリフォルニア、南西部に見られる。南西メキシコにもわずかに認められ、マヤ地域と南東部メキシコ、プレーリーの大部分、オジブエ族の住む亜極北地域に隣接した地域である。それ以外の地域には、どちらかの系譜で先祖との関係を辿る双系的なあり方が顕著である (H. Driver 1969)。

P. ドライヴァーによると、北西海岸地域の出自原理にも海岸沿いに様々な変化があるという (H. Driver 1969)。エyak族からハイスラ族までの地域は母系出自であり、父系出自のアザパスカン族を除いて、他の諸部族は双系的である。親族集団や地域集団を構成する居住も地域によって異なり、エリート層が主張する特権の種類

においても差異がある。トリンギット、ツィムシャン、ハイダ、ハイダ族等では、母系リネージのシステムを敷いている。ここでは母方の親族集団を通じて、権利や地位、財産などが継承される。彼らのより大きな単位である半族 (moiety) は名前や紋章が異なっている。母系制の他の特徴として、交叉イトコ婚、オジ方居住、親族間の冗談関係、忌避関係があるという (H. Driver 1969)。

## 六、家族

北西海岸で特徴的なのは、単系出自集団に基礎をおく大家族である。特に北部においてはオジ方居住で母系出自の大家族が顕著である。大家族とは、三世以上が同じ大型家屋に住み共同で生活する家族形態であるが、孫の世代が成長して伴侶を得たら家族から離れるというのではなく、家族に留まりながら経済活動を共にする真の大家族を指す。核家族に比べて、多くの人員を擁し、活動性と生産性に富んだ家族集団を形成する。南部においては、父方居住の大家族であり、この特徴はカリフォルニアまで変わらない。この父方居住の地域は双系出自の地域である。婚後居住規定は、北に比べて厳密ではない。これらの大家族は、幾つかが集まって生産性の高い場所を共有して利用する。また交易に従事してポトラッチ用の動産 (所持物、家財、奴隷など) を蓄積するなど、協働性が高い。カリフォルニアの中央部、南部では父方居住の大家族が原則である。これらの家族は一つの建物に居住する。しかし、近接し

た幾つかの小屋を占有し、それらは核家族用として使っている。母系出自集団による大家族は、北西海岸以外にも多く見られ、農耕民であるオマハ族、プレーリー西端のポーニー族、北部イロコイ族なども該当する。

## 七、出自集団

単系出自の地域では、一般に出自集団は、親族組織の成員を明確に規定し、外婚集団として機能する。また出自集団として成員の帰属を明確にして、資源地の利用や財の使用権などの権利を保証する代わりに、敵対集団の侵略に対する共同防衛や、儀礼や祭祀などの義務を規定する。これらのあり方は、地域における集団の統合度、リーダーの性格など、他の社会的側面と強く関わっている。

リネージは物質的な財産や無形財産を統制する。リネージに与えられるのは、サケの産卵する川、湖、畷を仕掛ける場所、食料となる植物の稔る場所、シダーの樹林、海岸線などである。リネージは「冬の村」の居住場所を所有している。居住場所や経済的財産は、あるリネージから他のリネージに移動することができた。ある父親はリネージの財産の内から、息子に居住場所を与えることもあった。この行為は反対側の半族の成員に財産を渡すことになる。

リネージの保有する無形財産とは地位や紋章、カヌーの名前、個人名、家屋名などである。またダンス、歌、物語などが含まれる。最も重要な無形財産は紋章の形である。スワントンはハイダ族が用



いている七〇種類の紋章をリストアップした(J. R. Swanton 1908)。これらは大半が動物の形であるが、虹、崖であったり、夜空、巻雲、層雲、積雲であったりする。ワシやシャチなど少数の紋章は、半族のすべてのリネージに共通している。他の紋章は特定のリネージに特有である。紋章はリネージを同定する時の表徴である。紋章はトーテムポールに刻まれており、顔にイレズミされ、世帯の什器や箱、祭祀用の皿、儀式用の衣服や髪飾り、ヘルメット、網帽子、太鼓、武器、カヌーなどに刻まれる。

北米では親族組織の用語として、リネージや克蘭などの用語に代わって、シブ(sib)という用語を用いることがある(H. Driver 1969)。一つ以上のリネージが、明確な系譜上の先祖には溯りえないが、伝説や神話上の共通の先祖を戴く集団として関係付けられる。シブは、リネージが分岐する過程で生み出される組織で、何代目かのイトコが、もはや具体的な共通先祖に辿りつけない状態を指す。文字記録のない社会では、六〜七世代経つとシブの關係に至る。シブ間では互いに通婚できないので、克蘭の概念に近い。アラバマの人口一八〇〇〇人のクリーク・インディアンでは、シブの構成員は、通常多くの村落に分散しており、四〇のシブが五〇の集落に分散する。平均では一集落あたり四五〇人ほどになる。一集落は平均数個のシブから構成されることになる。

## 八、半族

### 北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

生まれながらにして二つの分割集団に編入されるシステムを、半族(moiety)ないしは胞族(phratriy)と称する。北西海岸には半族組織が発達している。半族は基本的に単系の外婚集団であり、親族組織ではない。片方の半族に属する男は、反対の半族の女と婚姻を結ぶ。ハイダ族はラベン族(ワタリガラス)とイーグル族(ワシ)に分割され、外婚組織として機能している。それぞれが多数のリネージから構成され、一九〇〇年代初頭には、二二のラベンと、二三のイーグルリネージがあった。ハイダ族のリネージは、その起源をラベンとイーグルの半族に属する数人の超自然的な女性に求めている。北半の母系制社会の諸族では、子供は生まれながらにして父親とは反対の半族に属することになる。例えばイーグル族に属する父親の息子は自動的にラベン族の成員である。同じ男の姉妹の息子はイーグル族になる。したがって、その男にとっては自分の実の息子よりも、姉妹の息子の方がより深い関係を有することになるのである。トリンギットとハイダの半族では、紋章と起源説話に半族独特のものがある。

## 九、地方社会システム

クワキウトウル族のテキストには、オウエキーノ族からコモックス族(北部海岸セイリシュ族)まで延びる婚姻関係と儀式上の關係のネットワークが成立していた(W. Suttie 1990)。ヌートカ族のテキストが述べるところでは、十九世紀中頃ヌートカ族のポトラ

ちに招かれた客には、ソンギー族などの北部ヌートカ族、クワキウトゥール族が出席していたという。

また、ある民族学的研究によると、十九世紀の中頃、スココミシュ族のツワナ村(南部海岸セイリッシュ族)のエリートには、村々のサークルを通じて、婚姻上の繋がりがあったという。かれらはチェマカム他、他に三種の海岸部セイリッシュ語を話す人々がいたという。この村の人々は、様々に内容の異なるサークル群を通じて三種類の集落間活動に参加する。そのうち二つのサークルはスココミシュで重なり合う。スココミシュの何人かは村落間の「食べ競争」(eating contest)に参加する。ここではサトソプ族のような南方の村からやってきた人々と競うことになる。一方、あるスココミシュの人々は、マカフ族やソンギー族のような、北方の村々からやってきた人々と「秘密結社」の通過儀礼に参加する。二つの部族は社会的ネットワークで結ばれているが、文化的には決して同じではない。中央海岸セイリッシュ族のルンミ族とムスキム族から集めた家系図では、通婚のサークルがあり、互いにサークルが重複しあい、またスココミシュのサークルと重なっていたという。そして社会的ネットワークはジョージア海峡にまで拡大し、スココミシュ族とは信仰や儀式が異なる部族を含んでいた。

### 一〇、社会の階層化

スワントンによれば、ハイダ族のリネージ全体にわたるランキン

グは存在しないが、あるインフォーマントは三つのラベン族と三つのイーグル族は他のリネージより高いランクを持っていると述べたという(J. R. Swanton 1908)。リネージ間に階層差が横たわっていることを示している。

先住民社会は、個人のステータスがランク付けされない例もあるが、最高位から最低位まで厳密に規定されていることも多い。北西海岸先住民では、特にその傾向が顕著で、熟練した技術、富、その社会的継承、超自然的力などが基礎となっている。

社会階層(Social Class)は、すべての人がステータスと位階(rank)にしたがって、貴族とか、平民、奴隷のような限られた複数のグループに分類される社会である。普通、そのような社会では、個人を分類するための明確な基準が用意され、ある位階と他の位階の境界を区分するための基礎をなしている。北米先住民の社会では、東部極北地域やマッケンジー、東部亜極北地域、大盆地地域、北東メキシコのように、階層化が未発達な地域があり、ここでは生業活動が重労働で、土地の生産性が極めて低く、人口が少数で分散している。農耕は行わないし、パートタイムの工芸品製作者はいないか、いてもごく希である。フルタイムの専門的工芸製作者はいない。これらの地域では、真の政治的組織は発達せず、組織化された戦闘も少ない。ただし能力の違いは認識され、腕のいい狩猟者、家事に優れた女性とかは意識されるが、それによって社会的位階が異なることとはない。リーダーシップは弱く、最も能力ある個人に帰されるが、

先祖との関係で決定される訳ではないし、彼の優れた技術や判断が継続する限りにおいて支持者を集めうる。ステータスや位階に大きな格差がないので社会階層は生じない。

ところが、北西海岸では、富と生れによって位階が決定される。

北西海岸では生産性の高い資源場所は海でも陸でも首長個人が所有するが、それは名ばかりで、出自集団が管理して利用する。名目上の所有者が死ぬと、真の財産権は生存する親族に継承される。そうするとまた同じ出自集団が、同じように利用し続ける。多くの不動産、動産資源は親族組織によって運用される。無形の財産は同じように分有され継承される。社会の階層化は進展しており、富と出生によって個人間、親族組織間で大きな隔たりがある。大きな村に住む住人は概して豊かなエリートからなり、したがって高位のステータスを占めることが多い。階層は頂点にチーフをいただき、その下に貴族、平民がいて、最下層に奴隷が位置づけられている。ヌートカ族やクワキウトゥール族以北の諸部族では個人ごとに位階が異なるが、中央海岸セイリッシュ族より以南の諸部族ではその傾向は弱い。

### 一一、首長

社会の階層化は基本的に二つのカテゴリーに分かれる。一つは自由人であり、他方は奴隷である。自由人は首長と貴族、平民から成る。チーフ（首長）と呼ばれる個人は、通常、世帯の長であり、出

### 北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

自集団の長または地域集団の長である場合が多い。彼らの影響力は経済力や儀礼的地位に由来する。しかし、彼に権力を与える公的な議会や政治的制度があるわけではない。

シダー製のプランク・ハウスの所有者は家屋の首長で、彼の権威は世帯内の居住者すべてに遍く行き渡る。かれは、世帯の成員がいつ冬の居住地を離れて魚キャンプへ向かうのかを決断し、戦争に際して、彼の姉妹の息子達を招集する。個々のリネージは一人の世襲的首長を戴いている。彼はリネージが所有する財産の管財人である。異なるリネージの人間がそれらの財産や資源にアクセスするには、その前に首長の許しを得る必要がある。彼はリネージ内の問題について相談を受け、また戦争についてリネージの人々を招集して、戦争の可否について諮る。一つのリネージから出来ている集落では、リネージの首長が最高位の権威である。多数のリネージが寄せ集まっている集落では、最高位の権威は「町の主人」、「町のお母さん」と呼ばれる。このタイトルは村落場所を保有するリネージの中で、最高位の位階をもち、最も裕福な世帯の首長が保持する。

首長権はリネージ内で母系制の原理にしたがって世襲されていく。通常、タイトルは次の年かさの兄弟に委譲される。次いで若い兄弟、次いで最も高齢の姉妹の最も高齢の息子という順序である。富を獲得するのに成功するかは、首長の重要な基準である。姉妹の息子であっても、非生産的であれば、頭を飛び越えて、優秀な甥っ子にくくこともある。まれに首長権はサブリネージの個人や半族の成員に

わたることもある。まれに反対の半族に首長権が渡ってしまうことがある。それは父親が自分の息子に委譲した場合である。

### 一一、奴隸制

奴隸は北西海岸には一般的であるが、北西カリフォルニア、南西オレゴンには殆ど見られない。奴隸は襲撃によって獲得した捕虜となる場合の他に世襲的な奴隸がいる。一旦、奴隸のステータスが確立すると、個人間、社会間の売り買いの対象になる。主人は奴隸の殺傷と奪を握り、奴隸はしばしば、意のままに殺される。それは①所有者の死に際して、②ポトラッチで、③莫大な富の所有者であるあることを誇示するため、④新居を建てる時の地鎮供儀として、⑤食肉祭における犠牲として、殺されるのである。彼らは主人の所有財産であり、たとえ死に至るとも、どのような目的において使われようが、主人の勝手であった。奴隸の地位は永久的であり、世襲された。コロンビア川以南の地域では、奴隸は、自由人が負債を返却できなかつたために部族の仲間に奴隸化されることもあった。中央、南部カラプヤン族や南西オレゴンのアザパスカン族のいくつかでは、負債による奴隸が唯一の形態であった。

世襲的な奴隸制を有して、富の重要性を伴うこの地域の社会階層化は、この地域の文化地域 (cultural area) の顕著な特徴になっている。この特徴は非園耕民の中では唯一ではないが、余り例を見ないものである。北西海岸部の奴隸パターンは太平洋のエスキモー

にも見られ、南西部オレゴンのパターンは北西カリフォルニアにも見られる。

### 一三、宗教的活動

人間が非人間世界の個々の実体から力を得るといふ信仰は、北西海岸部の信仰システムには広く見られるし、北米先住民に広くみられる。その地域を通じて、シャーマンは自身の努力を通じて得られた「守護霊」の助けを得て、患者を治療する。海岸セイリシュ族から南にかけての地域では、守護霊は理論的には誰にでも手の届くところにある。それは技術や多くの努力が成功で報われる基礎をなすもので、冬霊ダンスでの成功はそれに関わり、個人は唄い踊るが、それは自身の守護霊に憑依されているのである。守護霊複合は北西海岸部の分節社会の中で、いくつかの発達の基礎を成すもので、北部の紋章システムでは親族集団と関係しているし、クァキウツール族にまで南に広がり、ワカシャン族、ベラクーラ族では、冬場の儀礼の「秘密結社」にもみられる。

### 一四、儀式

ハイダ族の儀式は社会の階層構造と関係している。主な儀式は祭宴、ポトラッチ、ダンスがあり、これらは高位の位階保持者に与えられた儀式である。そのようなことを催すのは彼らの責任である。人々の目に威信を維持するために、首長はしばしば祭宴を催すこと

を期待されている。また首長の地位を継承することに、子供に貴族の称号を与えて家屋を建てることにポトラッチを開催することが期待されるのである。儀式では財産がホスト集団から客人集団に分配される。最大で最も手の込んだ財の分配は、シダのプランク・ハウスが完成し、トーテムポールが完成した時に行われるポトラッチである。長期に亘って幾度も財の分配を行うポトラッチは、新家屋の所有者が家屋の首長の地位を手に入れることを宣言することになる。同様に重要なのは子供達のための祭宴である。子供達はポトラッチ名を獲得しイレズミを施され、より高い地位を獲得する。葬式のポトラッチは、高位の位階保持者が死んで、継承者がその地位を引き継ぐことを印す。葬式用の柱に彫刻を刻むことやそれを立てるのは、富の分配の前にやる。小規模の財の分配は、少女の初潮期にも行われる。

#### 一五、ポトラッチ

特権階層のエリート達は、自分の富と財産によって自己の地位を保っている。コッパ川からプジェット・サウンドまでの地域や十世紀のコロンビアでは、地位の向上に際して、ことあるごとにポトラッチと呼ばれる贈与が行われた。ポトラッチでは、ホストと招かれた客人の間に、一種の競争的關係が築かれる。より多くのプレゼント、より人目を惹くもてなしをすることがその個人のステータスに直結するので、結果として富の浪費と破壊につながる事が多

#### 北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

い。まさに「贈り物合戦」の形相を呈し、勝敗は地位の上下に直結する。M.モースが「贈与は奴隷をつくる」と形容したのは、まさに階層化促進におけるポトラッチの社会的意義について述べたものである(M.モース一九七三)。客は出席するポトラッチの席で、どの位置に座席を占めるかで、メンバー間の序列が決定される。しかもポトラッチは数多く催されるので、ある個人の席順は確定し、そこに個人間の序列が決定されることになるので、出席者は特にそのことに注意をはらった。

ハイダ族では、高位階の人とは子供の時に両親からポトラッチを開いて貰い、二、三個のポトラッチ名を付けて貰った人々である。男女ともイレズミの形でステータスを印す。これらの貴族は、家屋の所有者で、リネージ首長やサブリネージ首長の継承者と高位の名前を継承する者である。高位階にないものは、彼ら自身の利益のためにポトラッチを開くことが出来ない。彼らは自身の家屋がないし、高位階の名前も継承しないからである。彼らは位階の表徴をもつこととはないし、ポトラッチを開くこともなければ祭宴を催すこともない。

#### 一六、工芸技術

北西海岸の諸部族では、高度に発達した木材加工の伝統的技術が著名である。一つは木彫などの工芸技術であり、他にプランク・ハウスと呼ばれる家屋の建築技術がある。前者には大型のカヌーを製

作する技術、箱や椀などの生活必需品を製作する技術、仮面（マスク）やガラガラなどの宗教的儀式用の製品を製作する技術である。後者には、梁や壁の板材を得て、それらを組み立てる技術や、トームポールを製作する技術などが含まれる。これら優れた木工技術は、クギなどの金属を用いずに、熱やお湯などの蒸気を使って加工する技術で、彼らの伝統技術である。また植物性繊維でできたバスケット製作の技術も注目し値する。

北西海岸では芸術は他の何よりも広く知られた文化的特徴である。木彫や絵画、織物では、北部の二次元様式は最も直截的に認められるものであるが、しかし木彫の様式には他に二つの様式がある。一つは中央海岸部セイリシュ族地域で生産されるもので、もう一つはチヌーク地域で生産されるものである。木彫スタイルや織物には異なる伝統がある。一つはトリンギット、ツィムシャン族で、他方は中央海岸部セイリシュとその近傍に見られる。これらは部族ごとに若干の違いを見せつつ、大きな様式の中に組み込まれる。工芸の専門家は、長時間をかけて製作した品を、儀式や祭祀に拠出し、高い技術的評価を獲得する。

### 一七、身体変形

当地域の人々は、身体の一部を変形して永久的な一種の奇形を作り出している。これらは地域社会システムに帰属する標示物であると考えることが出来る。身体の変形にはラブレットを装着する口唇

部の孔、頭蓋骨の変形、顔面のイレズミなどが含まれる。口唇部に孔をあけてラブレットと称される石製品を装着した。これはある階層の女性だけが適齢期を迎えると装着する。

海岸部の中央には、人工的に頭蓋骨を扁平にする頭蓋骨変形の幾つかのタイプがある。タイプによって次の四つの地域区分が可能である。①ベラ・ベラ族、ベラ・クラー族、オーウェキーノ族、②クワキウトウル族、北部・中央ヌートカ族、北部海岸セイリシュ族、③ニティナット族、マカフ族、キリユート族、中央海岸セイリシュ、チェマカム族、南部海岸セイリシュ、④チヌーク族、南西部ワシントンと北西オレゴンの住民。

頭蓋骨変形の機能的理由として、地域社会システムの構成員であることを示す表示装置の可能性が説かれている。（高橋龍三郎）

### III 民族誌の調査

筆者らは二〇〇三年八月十五日から八月二十五日の日程で北米北西海岸部の調査旅行を実施した。調査期間中、バンクーバーからアンカレッジまでの北米北西海岸部を北上する調査旅行過程を経た。本調査旅行の目的としては、北米北西海岸部先住民文化と社会についてその様態を概観すること、諸部族の文化・社会の相違を認識することを目標とした。そして、北米北西海岸部先住民の文化・社会を日本先史文化・社会との比較研究に展開させていくという目標を掲

げている。本調査旅行では、おもに博物館所蔵の物質文化資料を観察することを実施した。調査旅行の行程と見学地・見学施設の概要は以下の通りである。

## 一、行程

八月十五日：成田↓バンクーバー（UBC人類学博物館）

八月十六日：バンクーバー↓ビクトリア（ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館）

八月十七日：バンクーバー（スタンレー・パーク、バンクーバー博物館、文献資料調査）

八月十八日：バンクーバー↓プリンス・ルパート（ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア博物館）

八月十九日：プリンス・ルパート（ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア博物館、ネイティブ・アーティスト彫刻作業小屋）

八月二〇日：プリンス・ルパート↓バンクーバー↓シアトル↓シトカ

八月二一日：シトカ（シェルドン・ジャクソン博物館）

八月二二日：シトカ（シトカ国立歴史公園、トリンギット族の伝統的舞踊）↓アンカレッジ

八月二三日：アンカレッジ（アンカレッジ歴史芸術博物館、アラスカ先住民遺産センター）

## 北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

八月二四日：アンカレッジ（文献資料調査）↓シアトル↓バンクーバー

八月二五日：バンクーバー↓成田

## 二、調査の概要

### □バンクーバー

バンクーバーはブリティッシュ・コロンビア州南部に位置する人口一八〇万人を越える都市である。筆者らはダウンタウンに所在するホテルに滞在し、バンクーバーおよび後述するビクトリアの博物館等の施設を見学した。

### ◇UBC人類学博物館

ブリティッシュ・コロンビア大学の人類学博物館（UBC人類学博物館）は、一九四九年に設立され、現在の建物はカナダの著名な建築家であるアーサー・エリクソンがデザインし、一九七六年にオープンした。そのデザインは北西海岸先住民の伝統的な「ポストアンドビーム」（支柱と梁を使った建築様式）スタイルを再現したものである。人類学博物館では北西海岸先住民各部族固有の文化を記録する貴重な収集品を数多く展示しているが、その収集品は広く世界各国からの考古学的資料や民族学的資料にまで及んでいる。

展示室入り口のゆるやかなスロープの両側にはクワクワ族やハイダ族の支柱や彫刻、装飾に使われた浮き彫り、食料の保存などに利用したベントボックスなどが展示してある。大ホールは高さ

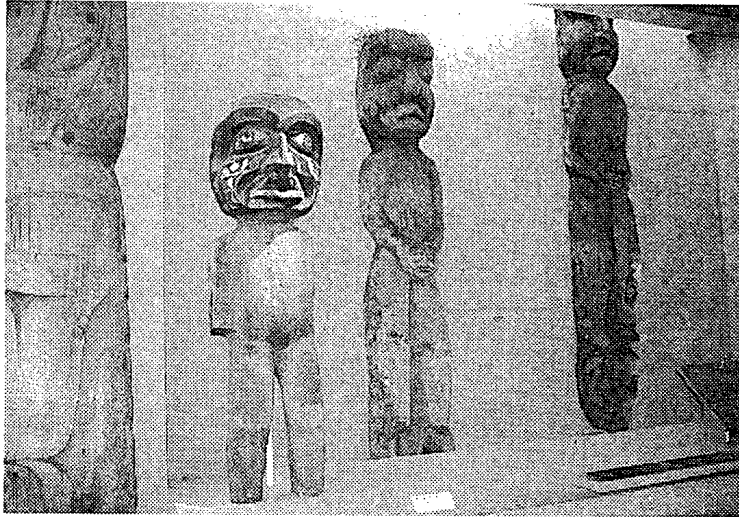
一五mのガラス張りの壁で、高さ一〇mを越えるトーテムポールやハウスポスト、動物などの彫像、ポトラッチに用いられた呪術的な食器などが展示されている。彫像はほとんどのものが一九世紀半ばに製作されたものである。

閲覧室には一四〇〇〇点におよぶ展示品が一般公開されている。ここでは、北西海岸先住民の物質文化を中心に、世界各地の民族資料が展示されている。人類学博物館の案内によれば、現在ブリティッ

シュ・コロンビア州には約一六万九〇〇〇人の先住民が、都市部および先祖伝来の領域である原住民保護地に住んでいるという。博物館屋外には二軒のハイダ族の住居とそれにもなうトーテムポールが移築復元されている。復元住居は六本の梁と入り口のトーテムポールに特徴づけられる伝統的な建築様式である。

◇バンクーバー博物館

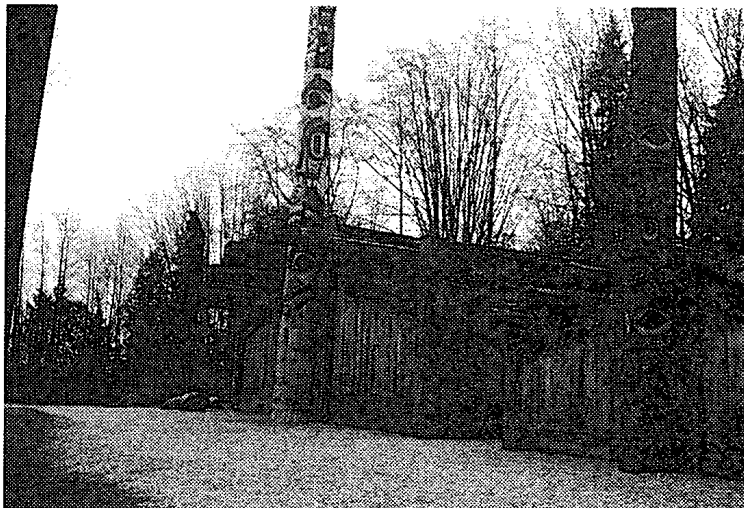
この博物館はダウンタウンを抜けたキツラノ地区にある。一九六



①ハイダ族の木彫（UBC 人類学博物館）



②木彫工芸（同上）



③野外に移築復元されたハイダ族の集落



七年にカナダ建国一〇〇周年を記念して建てられた。バンクーバーおよび周辺の都市の歴史や、インド、中国のコレクション、アヘンの歴史などについてテーマ別に展示されている。

北西海岸先住民に関連する展示品は、入り口を入ってすぐのオリエンテーション・ギャラリーと、バスケットメイカーの展示室があるのみで規模は大きくはない。バスケットメイカーの展示室でひときわ目を惹いたものは、食卓や食器などの調度品のワンセットがすべてバスケットで作られている展示であった。先住民の編み物技術の高さを実感させられるものであった。

#### □ビクトリア

ビクトリアはバンクーバー島南端に位置する、ブリティッシュ・コロンビア州の州都で人口は三〇万人弱を擁する。バンクーバー島は、かつてヌートカ族やクアキウトゥール族、海岸セイリッシュ族が生活した島である。

#### ◇ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館

この博物館は巨大な三階建ての建物で、一階フロアーはミュージアムショップやカフェ、ナショナル・ジオグラフィックのシアターとショップが入っている。二階・三階フロアーが博物館展示となっており、二階はブリティッシュ・コロンビア州の自然史について、三階が先住民の人々およびブリティッシュ・コロンビア州の歴史展示となっている。そこで筆者らはおもに三階の展示を見学した。ただし、三階フロアーの先住民に関連する展示はすべて写真撮影不

北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

可であった。

順路どおりに進むと、まずピットハウスの復元住居やさまざまな漁撈具、ベントボックス、衣類、マスクなどが展示されており、コインタクト以前の北西海岸先住民の生態と社会に焦点が当てられている。階下にはコインタクト後のさまざまな収集品が展示され、またポトラッチに使用された品物が一括してガラスケースに展示されている。大展示室には、トーテムポールやクワクワ族のプランク・ハウスが復元され、また壁面のガラスケースにはさまざまなマスクなどが展示されている。

ここでは、さまざまな記録類、説明文、歴史的な写真、文書等が豊富に展示に使用されている。一九世紀半ば以降、伝統的な先住民の文化は、病気の蔓延、商業的・政治的支配、ポトラッチの禁止、宣教師による教育の強制といったさまざまな困難に直面した。近代国家との一定の距離を保ちつつ、現代にその連続する先住民の文化が見受けられる。その歴史は、伝統的な文化と外部勢力との接触による文化変容、また変容を遂げながらも現代まで続いているという連続性を示しているといえる。

UBC人類学博物館とロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館は、その様相が明確に異なると同時に相補的であった。UBC人類学博物館は先住民の物質文化を「美学的プロセス」という視点から活用し現代社会に訴えており、ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館は「歴史的プロセス」を示すことによって、先住民

の物質文化がさまざまな変容をきたしながらも脈々と現代につながる連続性をもつことを主張している。

□プリンス・ルパート

プリンス・ルパートは、ブリティッシュ・コロンビア州とアラスカ州との境界に近い都市で、人口は一万五千人弱である。空港到着後、乗客はバスとフェリーを乗り継いで市街地へ向かう。市街地到着後、ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア博物館を見学した。

◇ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア博物館

ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア博物館は、北西海岸先住民のロングハウスを再現したつくりとなっている。博物館の標語として、タイムシャン語で「古代の宝箱」という意味を示す言葉が標榜されている。展示は、大ホールと四つの展示ギャラリーからなっており、ペトログリフやマスク、衣類、漁撈具、タブレット、アークライト製の彫刻など、一万年にわたるさまざまな展示物がある。なかでも熊の爪をあしらった頭飾りなどは、当社会における儀礼の果たす役割の大きさが感じられ、興味深い展示である。

筆者らがプリンス・ルパートを訪れたもう一つの目的は、可能な限りクイーン・シャーロット島に渡りハイダ族の遺跡を見学することにあった。しかし気象と時間の関係で、その目的は断念した。今回は学術文献を入手することとどまったが、次回はニンスティンツ、スカイデゲイト遺跡などを実地に訪ねてみたい。

◇ネイティブ・アーティスト彫刻作業小屋

ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア博物館に隣接して、博物館運営のネイティブ・アーティストの木彫作業小屋が存在する。ここではネイティブ・アーティストが木彫の仮面等を製作しており、製作技法などを見学した。描かれる作品のモチーフには伝統的意味が込められているものの、作品自体は美術作品として製作されている。しかし、こうした作品が現代のネイティブ・アーティストにどのように認識され、どのような解釈のもとに製作されているのかは興味深いところである。さまざまな彫刻刀にしても、現代の道具ではあるが、木彫技術（描かれる形態、操作方法など）と道具（彫刻刀など）との関係などに考察できる点があるかと思われる。このネイティブ・アーティストの木彫作業小屋に隣接して一九七八年製作と銘打ってあるトーテムポールが建立されている。おそらく最初から着色されていないものであるが、海風を受けて表面は傷んでいる様子が見て取れる。トーテムポールが海岸際に設立されていたことを考えると、その維持管理のあり方にもよるがおよそ二五年度で傷みが目立つようになるということが分かった。

□シトカ

シトカはアメリカ合衆国、アラスカ州南部に位置する。州都がジュノーに移されるまでの間、州都とされていた都市である。ここではシェルドン・ジャクソン博物館を見学した。

◇シェルドン・ジャクソン博物館

シェルドン・ジャクソン博物館は一八九〇年に設立され、一八九

七年にはアラスカ初のコンクリート建造物として現在の博物館が建設された。展示品はおもに一八八八年から一九〇〇年の間に収集され、アラスカに居住する主要な四つの先住民諸部族の日常品が展示されている。エスキモー族の展示物としては、マスク、バスケット、象牙の彫り物、内臓や皮を使った衣類、カヤックなどがある。エスキモー族の居住地にはほとんど樹木が生息しないことから、住居、ソリ、船、道具、武器、食器などの物質文化には流木や牙、骨が使われることが多い。アリューシャン列島に居住するアリュート族の展示としては、皮に覆われた伝統的なボート「バイダルカ」などが展示されている。アラスカ内陸部のツンドラ地帯、北方針葉樹林、山岳地帯に居住するアサバスカン族の展示としては、バスケット、衣類、カンバの樹皮を使用したカヌーなどがある。北西海岸族の展示としては、トリンギット族の葉巻、丸木舟、ハイダ族のアーギリイト製の彫刻などがある。アラスカの北西海岸先住民は、おもにトリンギット族、ハイダ族、ツィムシャン族に代表される。複雑な社会組織と、儀式的な生活様式などを表す物質文化資料が多数展示されている。収集品の中には一八世紀にはじまったアラスカ先住民の人々とヨーロッパ系アメリカ人との間におこなわれた交易品も含まれている。先住民側のおもな交易品は毛皮であるが、アメリカ人側からは小麦粉、紅茶、砂糖、ボタン、ビーズ、武器、火薬などを入手していた。

ガラスケースのほかに館内の中央キャビネットには引出しが三段

#### 北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

ずつ付いており、たくさんの遺物が収納されている。象牙の彫刻品、漁撈具、狩猟道具、食器、アクセサリやバスケットなど、さまざまのものが展示されているので、写真に記録した。

部族ごとに日常生活に密着した品々が収集されており、それぞれの文化の違いを比較しながら見る事ができる。展示室自体はこれまで見てきた博物館に比べ、決して大きなものではないが、その展示物の多さは目を見張るものがあり、観察にも相当量の時間が必要であった。今回の調査旅行で見学したトーテムの中ではここで唯一、埋葬用に用いられたトーテムポールを見学することができた。

#### ◇トリンギット族の伝統的舞踊

筆者らが宿泊したホテルと道を挟んだ向かい側に舞踏小屋がある。ここではトリンギット族が伝統的な儀式的ダンスを披露している。二拍子を基調とするテンポ、鳥の鳴き真似など、いくつかの要素に筆者がこれまで実見した民族例との共通点があることを感じた。

かつてはリネージが保有した伝統的舞踊は、無形の財産と考えられ、誰でもがそれをまねすることはできなかったし、その継承に際しては明確な資格が必要とされた。

#### □アンカレッジ

アンカレッジは北緯六一度に位置し、人口約二五万人のアラスカ最大の都市である。ここではアンカレッジ歴史芸術博物館とアラスカ先住民遺産センターを訪れた。

#### ◇アンカレッジ歴史芸術博物館

アンカレッジ歴史芸術博物館は、その前身が一九六八年に設立され、現在の博物館は一九八六年に増改築されたものである。一階は、歴史的または現代アラスカ美術を展示する美術館やレストラン、ミュージアムショップなどからなっている。二階はアラスカ・ギャラリーとなっており、アラスカの歴史展示コーナーになっている。一〇〇〇点を超える展示品と実寸、ミニチュア、さまざま復元ジオラマが多用され、イメージを喚起しやすい展示となっている。それらはアラスカ先住民の人々の物質文化がロシア人の入植、ゴールドラッシュ、第二次世界大戦などの影響によって受けた変化について示している。先住民の人々の遊びや伝統的神話、スポーツ大会などを映した映像資料などもあり、興味深く見学した。

#### ◇アラスカ先住民遺産センター

アラスカ先住民遺産センターでは、屋外、屋内で先住民の子孫による様々なパフォーマンスが開かれている。ステージでは約三〇分おきにストーリーテリングや民族舞踊などがおこなわれる。建物内部のシアターでは一一のアラスカ先住民の文化にかんする一七分程度のビデオフィルムを見ることが出来る。屋外へ出ると湖があり、周囲を囲む一周八〇〇mのトレイルに五つの村落が再現されている。エヤック、トリンギット、ハイダ、ツィムシャン族の家屋と作業小屋、アリュート族の住居、イヌピアク・セントローレンス島ユピック族のコミュニティハウス、ユピック・キュピック族のメンズハウス、アサバスカン族の丸木小屋などが復元されている。気候や生活

様式によって住居の形、材質、構造が異なる様子を見て取ることが出来る。

#### IV まとめ

本調査旅行ではバンクーバーからアンカレッジまでの間、北米北西海岸部先住民の文化と社会を概観してきた。直線距離にしておよそ二〇〇〇kmにおよぶ長距離の調査を経て、刻々と代わる自然環境とともに、社会的・文化的様相が変わる様を見ることができた。今回の調査旅行は、日本の縄文文化・社会との比較研究を目的としている。縄文社会の複雑化の程度や階層化の度合いを測るための相対的な基準として、北西海岸の民族誌に注目したわけである。資源の質と量、社会組織や出自集団のあり方などが、かかる部族社会の複雑化、階層化などに大きく寄与したと考えられる。首長と呼ばれる高位階のリーダーは、そのような親族集団と居住組織を基盤に出現する。その意味で、縄文社会の相対的位置について探る重要な糸口を得た。しかし、思わぬ副産物もあった。それは部族上の区分に関してである。ハイダ族とトリンギット族は、主に言語上の違いから、ブリティッシュ・コロンビア州では異なる部族として扱われてきた。しかし、アンカレッジのアラスカ先住民遺産センターではハイダ・トリンギットは一緒に扱われていた。たしかにハイダ族とトリンギット族は異なる帰属意識を持っているが、物質文化上にお

いてはその明確な差異を認めることは難しかった。このような側面は考古学的資料に対する観察の仕方にも影響を与えよう。我々は、同質の物質文化をもった集団は社会組織においても同一集団と考えがちであるが、必ずしも対応するとは限らないのである。

今後、北米北西海岸先住民の社会、文化、物質文化との比較研究を行うことと並行して、日本先史社会・文化の解釈に向けて理論的枠組みを構築する必要がある。

(熊林佑允)

おわりに

われわれは、比較考古学の実践として、「古代社会の発展と都市化の比較考古学的研究」というテーマを据え、まずその手始めに「縄文文化社会の複雑化過程」という具体的テーマを選んだ。そして、これまで縄文文化研究の上からしばしば比較研究の必要性と可能性が言及されながら、本格的には着手されることのなかった北米北西海岸先住民の社会と文化に着目し、とりあえず現地に赴くことから始めた。現地調査ならでは多くの知見・情報を得、また日本ではなかなか入手がたい文献などを入手することもできた。

しかしもとより、北米北西海岸とひとくちにいても、数多くの人間集団が住み、豊かな歴史を刻んできた広大な地域である。今回もバンクーバーからアンカレッジまで太平洋岸沿いに約二〇〇〇キロ、日本列島縦断を越える距離の旅であった。一度や二度のしかも

北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究

短時日の踏査でどうなるものではないことは、承知の上である。

たとえば今回は、プリンス・ルパートを訪れながら、気象と日程の関係でどうしてもクイーン・シャーロット諸島に渡ることは、できなかった。この島々こそ、北西海岸インディアンのなかでもとりわけ興味深いハイダ族の伝統的民族文化が豊富に観察できる地域である。近い将来、ぜひ訪れたいと考えている。

いずれにせよ、このようにしてわれわれは、ひとまずこの地域の考古資料・民族誌との比較をとおして、日本列島における縄文文化の実態の解明に向かいたいと願っている。

なお、本研究の遂行に当って菊池は、主に文部科学省科学研究助成費基盤研究(B)(2)(代表者：菊池徹夫)、および早稲田大学特定課題研究助成費(代表者：菊池徹夫)に拠った。また高橋は早稲田大学特定課題研究助成費(代表者：高橋龍三郎)、鹿島学術振興財団研究助成費(代表者：高橋龍三郎)に拠っている。本稿はそれらによる成果の一部である。記して感謝する。

(菊池徹夫)

#### 引用・参考文献

- A・テスタール 一九九五年『新不平等起源論』山内昶訳 法政大学出版局  
川西宏幸 一九九九年『古墳時代の比較考古学——日本考古学の未来像を求めて』同成社  
川西宏幸 二〇〇一年『初期文明の比較考古学』同成社

- クリフォード・ジェイムズ(毛利嘉孝ほか訳)二〇〇二年『ルーツ 二〇世紀後期の旅と翻訳』月曜社
- スチュアート・ヒラリー 一九八七年『海と川のインディアン』雄山閣
- 木村英明・アヤ子訳
- 高橋龍三郎 二〇〇一年「総論」『現代の考古学六 村落と社会の考古学』朝倉書店
- 谷口康浩 二〇〇二年「環状集落と部族社会」『縄文社会論(上)』安斎正人編 同成社
- 都出比呂志 二〇〇〇年『王陵の考古学』岩波書店
- 角田文衛・上田正昭監修 初期王権研究委員会編 二〇〇三年『古代王権の誕生』I~IV 角川書店
- 出口 顕ほか 二〇〇三年「〈特集〉人類学の方法としての比較の再検討」『民族学研究』
- D・キュー、P・E・ゴッダード(菊池徹夫・益子待也訳)一九九〇年『北西海岸インディアンの美術と文化』六興出版
- 中村 大 一九九九年「墓制から読む縄文社会の階層化」『縄文学の世界』朝日出版社
- 濱田耕作 一九二二年『通論考古学』大燈閣
- B・G・トリッガー(菊池徹夫・岸上伸啓訳)一九九一年『歴史科学としての考古学』雄山閣
- 前川 要 一九九四年『イングランド・ウェールズの中世城郭と都市の空間構造——比較都市古学の視点から——』国立歴史民俗博物館研究報告 第57集
- M・モース(有地 享・伊藤昌司・山口俊夫訳)一九七三年「贈与論」『社会人類学』弘文堂
- 武藤康弘 一九九七年「縄文時代前・中期の長方形大型住居の研究」『住の考古学』藤本 強編
- 山内清男 一九六四年「日本先史時代概説」『日本原始美術1』講談社
- 渡辺 仁 一九九〇年『縄文式階層化社会』六興出版
- Driver, H. E. 1969 *Indians of North America*, The University of Chicago Press.
- Druker, P. 1951 *The Northern and Central Nootkan Tribes*, Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology.
- Drucker, P. 1955 *Indians of the Northwest Coast*, Bureau of American Ethnology Smithsonian Institution, The American Museum of Natural History.
- Suttle, W. 1990 Introduction, in *Handbook of North American Indians, vol. 7 Northwest Coast*, Smithsonian Institution.
- Blackman, M. B. 1990 Haida: Traditional Culture, in *Handbook of North American Indian, vol. 7 Northwest Coast*, Smithsonian Institution.
- Swanton, J. R. 1908 Social Condition, Beliefs, and Linguistic Relationship of the Tlingit Indians, Extract from the twenty-sixth Annual Report of the Bureau of American Ethnology.
- Trigger, Bruce G. 1993 *Early Civilizations: Ancient Egypt in Context* American University in Cairo Press.
- Trigger, Bruce G. 2003 *Understanding Early Civilizations: A Comparative Study*, New York, Cambridge University Press.